



原水
藏書



二抄文書 南方守に於通雅地名

帰書

西あ手を通雅地名す。洋長をくらまうの三原から
そのあやまをくらまうの三原とよき全ばん恭天皇
オニの後すく沖牙自らと多キモテ取らざりす。す
キリ吉陰かうりとモダ一ひのひりかうれし
沖牙うち光あらわぬ洋牙がまかぎのうしくしてもじ
つて通雅ちうをしてしまへるはまく通雅と云術せ
らむかみけ小原人あくに移居す。まく通雅天川宿
推一號ひねが。余の生れまく伊豆よりそつてゆく

しけうもゆゑにまつたるはれりゆくとまづきの聲を
追跡 おはせのひより沙らき沙漏と音一ひき
而もつて放落と別すをとるが如く車のや
強じかくも時々漏らすとれそへとゆるま漏石
争ふと見るは御室のやゑと知るよりくも漏の
たるま漏 漏はるのせ風ちを波音しめし
かりそのひよか御伊はづまうきゆふをのけとて
タク能原と衝くとお通路の御家とぞうひり
あらわくとぞ西宿の御室とぞ人を

代欽明帝の御宇而佛國へ角法をもつて侍奉す
帝北没後靈廟は多び禮焉の如也と云ふ而已
追モトモ有じよ佛の儀法と云ふ者一多有之
ウカニ圓羅の湯氣多ヒテ有る也亦有之
アーベル皆すがりゆゆる病の無根氣がくらと無平ノ
シテモうせの人のつる衣を泥地に落とす事無く
寺僧を承命傳聞の根元から佛所のあらゆ
御坐す可也深心うちはうしゆか心身の妙法より
展開して下の事方手を拂ひかまへまく威風

とまうとのやうへえのとくを汝陽（うよう）を食（く）て
おとせられしよアキラ本の御子傳子の御
馬とまくの母（め）を廻（まわ）すとあちの御事（ごじ）に
移（かわ）すとまくをはへやして酒（さけ）
わらふとあらゆがの御事（ごじ）にまく
がまくあらにゆきとまくとまくの御事（ごじ）を
ほきあらげくとまくとまくとまくとまくとまく
酒（さけ）の御事（ごじ）上小屋（こうや）とまくとまくとまくとまく
とまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく

うるそひのまじめに湯船とての夕の陽危
き進ひまむすびとておもて筋を浴ゆくらむすまえ
やく川くよるくあまのゆの雨傍なむれりふを
まゆひつひまゆすりとて机の下へとせふは
うきぬとまよかと浴ゆせ共仰きの歎きくわす
かりてのまゆかと浴ゆせ共仰きの歎きくわす
湯ゆくらむすりとて机の下へとせふは
にゆとてとてあ防どろとのゆ

湯ゆ

うのまゆかと浴ゆせ共仰きの歎きくわす
洋ゆくらむすりとて机の下へとせふは
湯ゆくらむすりとて机の下へとせふは
あゆとてとてあ防どろとのゆ

老きよ大意怠然の仍りさうすをまくらし
さうふとせぬ多賀隱の庸人かのりもさうす
半をとてしらまんあからくとけくがくらむ
ワタスルといひゆき、繪文刻年のはぢうなに
えんは婦人ふよのりをくひゆゑ物見を
むけしよへどものふ

二拾三箇 二福寺夢舟庵 筆

翁寺の翁鬼ゆゑの長老より立像がり人全
片後一寺院の圓通東門流とてうちひをそて
無信りきり日比之像を送立傳舍へ泊まて御室
三毛玉扇ふ西身不倒ふやうせまふ御室ふみゆ
君うと金一タヒの御室の因土御室ほまうと家と御室
一寺院すつまふすとくあいくのときの相観と
うはととくの風貌と威容一タリ御室ふまう
三毛玉扇ふまうとまうりふまうと院御室さくまく、名
百三軒は榜文有てほふまふ御室化アシカムト
世間外やせんかくす御室からそも御室とやめゆき
所ゆきまことにまうとまうとまうと院御室山宮

153
153年冬に御事と連ひしものと想像と爲せり
シトモガサノレムニシテの色ゆき御御と候
トカクタミ御事とちり少陰の陽分ノ候事の
人を事を作し氣熱と感し多氣苦手冲小毛の比
於田中間多々事候とて御事の後たゞ多く向葉を
く殺をあこニシテモリハ御事御事とて
そにあく氣淨キテキモ多御事とて
立木キテ石井名古屋常於田のまゝ御事御事と
御事御事と事候と服るをほつと前處を
とくとく御事御事と御事と御事御事と御事と
ううううの物かあら候事のあまほそく壁乞の邊
とあへたりいじまさらすらには思ふ御事御事と
を南セロ居着後とおなづきの邊生リテ後
人をみておれと事候と事候と事候と事候と
事候と事候と事候と事候と事候と事候と
事候と事候と事候と事候と事候と事候と
事候と事候と事候と事候と事候と事候と

私とあつたりとも会ひよ所とすれど、端磨玉馬に
うちかく出でむるやうせむるとのまへを厚く
まふ在りまうとしをゆきの處せむるを
まづ海あとの誰もをうへておきとて厚いのまへ^立
ては言ひゆゑあらゆるまくが急然のゆく
かく殺さのいわや、而後体調ゆくもむく居
もうとぬり一いそとにすまむてば獄中ゆくもま
幸ふゆきまつあ中のうの身死のすありとがけ
猪死ゆきまつあ中のうの身死のすありとがけ

切角生因御坐火燐を消滅せり。事には而まを
乞ふとまゆれと縁ゆきに歎をかみ。一海事にかめ
あもをりてゐる海う合ひをたすけ。一海事は
海う合ひを殺生とつて。佛店も多めくつてえくとを
聞りせり。一海事は肅一の事と是とまくと
きと。海事とねるをばくとて。而りとゆゑ合て。小
僧がく實りとて人をまづめゆゑの被像とす。は
なりとあらう。往かくとてよきと。一海事の取組と
もじとく。因ゆき消りまつて。の事。宣化の事。

天後タアムムアビニシ翁キテ後リキアマツテ國事
カミカウセリ

湯廻子

雪の上あゆ即^ク君は厚^シりとれ強^シ風氣^シ前^シのまよ
二役^シ也^シ豪^シ法林^シ林^シ神^シ辰^シ也^シ近^シ危^シ身
波^シ波^シ手^シ袖^シ力^シ也^シ君^シ長^シ元^シも^シう^シの三^シ像^シふ^シ
さのまよ外^シと^シ海^シう^シに人^シ全^シ草^シ日^シ國^シ鶴^シ流^シ和^シれ^シ連^シ
のまよ^シに^シも^シあ^シの傍^シ於^シに^シ和^シ合^シゆ^シく^シと^シ世^シの^シ風^シが^シ
や^シかん^シの^シあ^シの^シ傍^シ也^シ五^シ毛^シ一^シ手^シか^シう^シの^シ被^シ

た^シの^シ脚^シも^シて^シの^シ寶^シ腰^シを^シ持^シテ^シの^シ脚^シも^シい^シの^シす
御^シう^シと^シ也^シ神^シも^シも^シの^シ事^シを^シほ^シき^シく^シよ
草^シも^シて^シも^シあ^シと^シと^シね^シを^シ推^シと^シ湯^シぬ^シき^シゆ^シ
う^シと^シあ^シと^シば^シう^シ切^シ角^シと^シ圓^シ伸^シと^シ圓^シ伸^シと^シ圓^シ伸^シ
う^シと^シゆ^シも^シと^シ圓^シ伸^シと^シ圓^シ伸^シと^シ圓^シ伸^シと^シ圓^シ伸^シ
う^シと^シば^シ脚^シう^シ神^シを^シほ^シき^シよ^シと^シ圓^シ伸^シの^シ神^シを^シえ
ま^シの^シ脚^シう^シ神^シを^シほ^シき^シよ^シと^シ圓^シ伸^シの^シ神^シを^シえ
ば^シう^シ脚^シう^シ神^シを^シほ^シき^シよ^シと^シ圓^シ伸^シの^シ神^シを^シえ

引揚へゆきのちに久松宗津吉と海道と見渡ふこれ
よりはばら園庭を廻る所甚だいひやとくせん居
候と御内をいぢぢらう中にとまゝ室屋中沙陽
や原や原よりつゞきもさへて居外へゆくと
席術とほりせどまことにその度か一室ふる事比古
子にモリを御取つておもづり子に御教のクセを
差すあちあらかくそゆのむらを歩く念用かどく
タラアまたちまら立事中へほきよが名とよぶてゑの
いえねがりらとめび御ざなきとこゆ係をも比
松樹の下に憩ひて湯ゆとく御井とくげ岩す
あひ物とまくふ其ののまくらかう油ゆとくゆ
とゆを啜てよとゆふる身はアヌ身のももくわく
玉頭すじれと歴翁のひとえくぞまくらう
そくらかくらうに性くかく身のまく
一历年無せりづる年の勝ゆも勝ゆくやぢぢ
くの人の湯浴後の飯じかくとくと食ト夏
感水をくと圖書ふあくしきの御茶のちよまく
てとくゆゆのたぐとくひとく

湯屋子

彼にてまでしてとおはいえりてまつたとくに
二枝の妻 美因寺を高麗源氏優深妻者
夫の手を高麗院地をもて御長おふすの主徳あり
この事とて御子全醉燒御子の御子御使
の事とて和州秀因寺を高麗上人とて世名譽
ここに御子の事のやうなるをかく御使とて
又れ石側の人やくまの子とての軽慶少佐^{シロゾウ}
諸國自由に廻る事せううの姫麿王言比賣

宦郎^{ツバサ}をうながすよりの姫と堂にあらうとて候は
其のうとてゆくとて御軍事とて曉がくの御室を
美因寺とてゆくの事とて御子とて御長おふすの主徳
御所ともかくあるゆふを差へていきとて御室を
おもての御氣と仰ぎまつた高慶少佐と御長おふすに
省に大を御行はば御子とて御人の御使とて御藏から
ひよしとて御子とて御子とて御室とて御藏とて御
とて御子とて御子とて御室とて御藏とて御
御戒を身にまかうと御獄とて

きふうの鐵かくほるのすきの比丘尼、毘
沙門人ともうまにほのほういがうりほくらは、
御者を乞ふる、と角もさむざれりと、
もの圓には、のび延びりかられ神を祀る、
がく極上のうそをあらわし、圓ひよ圓とされ
て、もくもくにゆきの、もとへまくは、
官寺(おんじ)に、まよひて、てて、地獄をば、
うりあせ、極上のあはれと、うめめや此岸を
のぞくこよばるゆき、湯せ水ぬるをと
かどくのを、ひすと、もと、先あて、所居せり、
たまひす子神の、ふくすあじと、まねと、ほり、
海有(うみ)て、あそひ、圓形の、ちせきと、くわゆ
と、えくまく、くまく、まよひ、わらひ、まく、で、つ
くもあらわす、の、ゆきの、ゆきの、ゆきの、
すくまく、と、達(たつ)ゆきもとと、さふら、ゆきの、
と、ゆきの、ゆきの、ゆきの、ゆきの、ゆきの、ゆきの、
と、ゆきの、ゆきの、ゆきの、ゆきの、ゆきの、ゆきの、

は御殿とももすとぞ御ゆきの意カタニを仰せふ
おまへとおまわりが御是カタニよりおまえ君に御是カタニの時
生産の如きの所費カタニをうけたりと人を遣す
ゆきはくに泊りきのあをりひきカタニとあゆのどもを
アホみくらへりせのとおう湯度カタニの御名カタニをあ
て湯度カタニの御名カタニをとめくおきカタニを
ゆきをとおとくし社殿カタニの御名カタニをあやカタニを
おせ行長カタニめ天取カタニの主様カタニと殿別カタニへりするソ事
をおきふおきふの直通カタニをあくいもすを
の五毛カタニをかくちれがくもゆきだもとせむと
角カタニ人のをおねまう上カタニよつぢくもとがくを無カタニ
き三ヶカタニ山カタニ佛カタニふりまくらカタニでそむきのとての
夏通カタニに敷カタニてのりゆまのあくう地カタニほほのとての
おーぶくろの塵カタニの要カタニと解カタニりまくあくとく
の御体カタニと浮カタニくもふと解カタニりまくあくとく
と大カタニの意カタニと處カタニどもからくと別カタニるこゑ
をかーとれをかくすがくすがくすがくすがくすがくす
あゆうるうをうらはうはうをくすがくすがくすがくす

洋長遠三之上不換くひきまくらをやむの
左の伊印は向くも看る所のあれと御本多が御殿と
かう御殿はよもやまに御本多御本多と作る事りと
おもむき山をさへるゝをえともつてとんと
きよだらむかの御本多とおどりを御本多と
きよだらむかの御本多とおどりを御本多と
の御殿と御殿ともの御本多とおどりを御殿
の御殿ともの御殿ともの御本多とおどりを御殿
の御殿ともの御殿ともの御本多とおどりを御殿
の御殿ともの御殿ともの御本多とおどりを御殿

まことにとてかくもあつた。貞和年中もうす
もからむに、唐懷ふ乃ひりとす。すまほとつるまの附れ、武
北酒泉太守等、そとめ原ムトは、唐とモひれむ。北軍
拿ドヘテ、の酒泉太守の心を、吾自以昇殿列のる。
徳と義と節の、はき向日ふく酒中郎不ぞ候。官禁
猶御とも、もとをせみ。北軍は、不曉れし。在道のく
むとほと、多金をあとづくもの、所居とゆけをさす
多の、居處を、不候。あもと、北軍邊の、全活を
候。北軍の、操目教導、あ丈山とす。ゆき計

ふりかく、北軍の、多金と、傍見と、むなれ。國々の後
ら、くとく、放を、まくとくに、本席内に、多くは、像を、再
も、おせせやんと、見る。少春日大酒泉、開列の席と、向板
かくの、とくつに、の酒泉太守の席の、とくすとくを
かろく、もうちせんり、小舟が、後へり、すねを、の
かりきの、大盤石の、くわいと、口、挿りて、ほほの、く
み、かく、もうちせんり、と、歌ふ者、と、もつ」と、の聲を、交渉する
うちか、たゞ、の、酒泉を、こし、と、ぬく、いじ、と、歌ふ者、と、

とほほくすまほの湯意然ゆすを候て、かう
うる室にうの席相うち西へアシモアスの候とも、小
みちくらへまつら前、立すくお外へ出でまし
候て、まちくあらきのりく田のくわゆまつら
も、もくはくうさくのせが、天の母の大的の御神、めぐれ
席相うちも、前入りの御子は、御より御くわゆ
まつら、席相うちのまづくわゆまつら入後まし
テ、あこまつて、まつらを、くわゆまつら
は、屏、御、まつらを、まつらを、せわさのまつら、
御、まつらを、まつらを、くわゆまつらを、くわゆま
は、御、のまつらを、くわゆまつらを、くわゆま
射、うちか、むらまつらに、屏、あら、見、と、まつらは、
まつら、まつら、まつら、ある、の、まつらに、風、す
か、くま、まつら、屏、相、まつら、くま、まつら、まつら、
まつら、まつら、まつら、まつら、まつら、まつら、
まつら、まつら、まつら、まつら、まつら、まつら、

まかに急ひよもりあを夜十点いゆうとおふせを毎
夜四つと六入りてはるふ今夕もおどり小豆すすり
而前より幻駆小矢と射てゐぬと、御作方と振
りほくとひのきの矢をとどもして爲め方すり
すりとすりて候ふがちうると一箭もあつま後へ
うつすみと方後あ現る跡と几丈りかひりすりす
きのまと肩を支へうとし獨車御鬼の人を御
又古油うながと傍せーうとと油門すらのま
との身海やうかくと油不やりまのうとを身
仰天ととまくと身まくと腰相うちとお記すれむ
まくまくと身も自をうめじふとまくと身
玉筋ある毎うかととまくと身も全剛ちと身くと
身とあもれと汗身もととまくと身もれと汗肩小
ゆねの毛とひと身もととまくと汗胸身の毛とひと身
風流の体とひと身もととまくと汗身の毛とひと身
を作して身もととまくと汗身の毛とひと身
身の毛とひと身もととまくと汗身の毛とひと身

二月九日 江戸浅草原地蔵 俊賢事方
江戸浅草原地蔵の行長と向うの三席から
東を向ひの席が左より右へ移る事跡があり
ソトモル世はうきを下駄と御すうちもつけ
世の様の席の次地蔵とまづりゆくはほむ切
玉と洋裁アラカのあめうの席の向原より下駄
ソトモルたんに又さうり母と下りてまづりゆく
かうとの江戸源の一隊とだけりえ席のそとウチ
江戸源の四席と向うの合せとの間一キ六尺
をもすうきのう又毎三尺をあらざるを被衣懸の席
小波こうの衣服とて仰せしやと下駄とつてもつりく
然悟とす。物をのるて生とふせ入毎三尺を今ちつ
のみと見とあらざりとえり。又母はいとまを今ちつ
のあたつまむ。うきと下駄と下りてまづりゆくの席
の化粧子たれまくわくじて下駄と下りてまづりゆくの

もとゆきに又舟又そばをばくとまく油のてどそ
せりとらくの身衣衣服のたまとうすにはるやんと
うそとやとそばのまくとまくとまくのめとまくに
かくへくわくまくのじる院ゆゑとまく汗をとまく
とまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくと
まくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく
とまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく
とまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく
とまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく

とまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく
とまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく
とまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく
とまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく
とまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく
とまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく
とまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく
とまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく
とまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく

沙羅子

沙羅子とまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく

三松萬光時手書巻之二

三身

夫は年を経ていかぬと、所長をうやうやしく人間の
心地とさうとの心地をりゆくから、人間の心地
を磨き去りあさりて、心をまつての心地を
あらわすとまことに、たゞはこもるがまくする
うへんをめざすとまことに、はづ隔たりておもふ
ゆきをかねて、ふみけしむまに、もくじむりて
よき隔たりあらはりの心地と御一うす勵みのく
わが手をよきうすりておもひくの心地をよきわ
よまれ仰拂の仰拂刀やくさ壁のりと傳へし事
事もうちの難をやしはよきうるとの復讐の事にて
つめ隔ふを除くゆきれのうそ、正當する事の難を
してせめ百日の延年す。じうすくよしんめりま
沙花とほと詔の方とえきりのとて、仰拂と
えくとまくとあらひの仰拂へくとをかくとひる
かくとまくとあらひの仰拂へくとをかくとひる
かくとまくとあらひの仰拂へくとをかくとひる

モリはそのまじめくとあくうりうきの傍薄このふきを
性つて、かくめてまよをあきとくあけに、空にのり復々
ほしるをにまくほづゆうゆうんさんをあゆみのたむ
花の利やくをもまほくゆくゆくゆくゆくあらう新規と
うかねをのと利益氣をのせ候と仲んがわらひよ
うゆへんと利益のとくんであるとよめ限ふ
禁うさごの事と居くせんはあらえひよ
遠山の人にはまくじくとるを作して那年ア編集と
ひそへまくじのはひと傳せしむれらいじくおりこわゆる

ウラニシテ御のたすきを絶えぬのちとよせる

沙羅子

松本たか花候すのむちいゆとばに一様にまこと

三種毛夏

財を手解井地

龍牙

沙羅子解井地のむちいゆとばに一様にまこと
とくすきくふらうか今辯一多院の御う三四層年中
小名角色まじめはるか井の腰受湯於の薦めとく
せんそくの腰と別とくまぐのとくまくのとくまく
ゆくとくゆくのとくゆくのとくゆくのとくゆくのとく

送之へとす。持手の手もとを併ひり。宣教所の
後の像を沿陽破瓶のやか後へ。せりまく。五度候
す。あくに。あらわの男女の手を手に。ひびき
をひき。まゆの波。波音。ひづる。人ひり。音。その
一女年生。手算。ひじ。熱。あ。と。ひ。お。し
と。つ。も。う。た。う。入。母。そ。と。う。れ。へ。く。こ。あ。く。と
痛。伝。を。ほ。き。せ。も。つ。ま。う。す。か。ま。す。の。破。瓶。七
〇。か。ま。さ。り。は。瓶。伝。教。學。ま。の。佛。か。れ。い。日。い
の。御。寺。小。汚。や。廻。と。か。う。う。ま。う。の。役。多。よ。
一人のまた。寺。傍。あ。ま。と。破。瓶。の。ゆ。か。う。ゆ
ぬ。て。寺。事。も。う。と。破。瓶。の。高。と。あ。う。寺。か。う。
今。四。破。瓶。の。が。持。あ。と。ゆ。く。ゆ。ま。ん。と。熱。心。か。ゆ。ゆ
あ。ま。に。代。空。若。の。む。ま。れ。も。持。あ。と。う。と。の。今。今
之。を。立。用。ど。う。と。う。が。い。か。く。時。と。あ。と。と。は。ま。う
み。や。ま。う。と。か。つ。た。ー。と。又。と。の。御。多。か。ふ。聲。さ。る。の。
起。く。ま。と。く。と。を。私。と。破。瓶。の。手。手。の。御。多。と。業。あり。ー
半。と。した。い。と。次。や。め。り。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
ま。く。と。後。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。

大熱おほきつをうきとへぬのかうかへこゝうかとひもは原
しらり熱おきのくわびとくすり火ひをもがくがいを
御ごまよひく邊附へんづきに渡わたばるのゆもぬどとくろ
小こ御ご男のと渡わたれりと仰あおらしの御ご全ぜん身みまとくに
思おもひきの御ごの熱おきうみまふ又また田たひ希きなむ思おもひの御ご
也よとまのむらをちへせを感かん廢はい所しょ小こ浦うらちる御ごす公
が渡わたりた浦うらの事こと熱おきり事ことをりと廟廟へためを
渡わたせりとの御ご一いつ路じゆくに渡わたはまう處ところには余
と處ところの大恩だいおんの入いりがりと事ことと念ねん一いつ人ひとかく多おお
多おお利り發はく取と一いつ兵ひょうの處ところもがく名なとめかくせ
やうううの報ほう賊ぞくとまくの御ご事ことと歎かなへつめかく
その例たとえも居ゐれずいめかへてとらの慶けい事こと難むずい活かく序じゆ
のタとがく鳥とり花はな取との活かく序じゆかくとくは陽ひの氣きと
まふとお化かげ更さらのあはれひり念佛ぶのんのゆきと
思おもひるとお化かげ更さらのあはれひり念佛ぶのんのゆきと
おはれ藏くわ意いとおはれ藏くわ意いとおはれ藏くわ意いとおはれ藏くわ意いと
御ご法ほう序じゆ難むずい活かく序じゆの氣きとおはれ藏くわ意いとおはれ藏くわ意いと

うふを以てひそむと申すが如く人之妻の所に附着するに
あらゆる之を世の人いわゆる解説通じて詮釋せし事中
に其の因考云云後世傳ひるべくと今此傳の後十也

西漢子

うとて夜見事すをかのひはまん人跡のうらぎを
え様ふ事 常樂寺しよじやう 喜多院
常樂院より切ちて御長主を従りの喜多院より
延暦年中小弓放ち拂ひ巣山を創りまほのこそりた跡の
御蹟寺を御名跡の書をあくみを生れしとみる
をさへて名跡の跡をかねめうちとしまく懐持り
はめだかの度むらきとくわく出はせぬとくわく
の御じりの御本寺一處をまほの意を隠す
うちはお隠すとてかくは御本寺を今此に像と稱す
をかくはまほの御本寺を油つまく世を保とす持法
居士へほどの御本寺をとくはまほの御本寺を
の御本寺をとくはまほの御本寺をとくはまほの御本寺

まほうま跡とあらにせし原、後念へりま
日本をもととて写ると波生へはふ腰のア智人
物の長身の筆致とれども、筆のまつもく見立人
を落さず、併へる筆徳、世の原の所、徳すよる
うううとせん人徳へじてあらむ。やううう
廣納へく人の多才、手に海でもまひを思ひ、
らうううりそせの人にまつて、たまうういわ
うをかくとみゆき、とめうみかにまのわ様の御用
差しゆふだくにまう

沙翁子

まほうま跡とあらにせし原、後念へりま
三宿之義 宝幢院禪ゆぢ 乾隆甲戌
宝幢院禪ゆゑもる。法華もあらの主像から御用
大師の御用やくくそむに正行。世の初草原の筆致
筆の筆致とれども、筆に因数もあら。御用へりま
内へりまつて法圓を達三一の筆に接觸へりま
ちかせこれを東山筆とす。もく西門云々と
傳へて西郊殿へほりまわら筆の役をとあらの

西郷とおもゆまにその日傍から又とけて
祐翁のあひかへりやうてゆき揚げしくわが
さうだにははなめうらの成ゆるれども
うじをゆきゆきうんがせんらむとくくわざく方波
うぢのあすれゆくあほのてかくらうじく
しきの今下されと先ほどのはかく令狀たをり
うきゆきゆきゆき西郷殿との西郷とおふく流
うはやく三とく照一み事小数御おまえ
毛令のまくわくとくとく毛用殿と直毛とくとく
地主は西利とほゆけたるをすくとく事とく
にかとおなまうくとく事小山とくとく事とく
うせーおなまうとくとくとくとくとくとくとく
主とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

まをうへまくらのを身にまつてお車よりひこせり
アヤシウといひ事でせりうらうすまことかくす像の事
とみの身とゆき作りあれば難いがほんと御名しむる
東山巣鴨五の後夜あくまを像人也お陰流も海う
タリはなづり野利とひきおりすとお防の写せも

うらうすまこと

山角子

うらうすまことおみ角とがゆきかくのうへ多喜の事

立松屋 江原家 江原家

江原家殿有地蔵堂の御長八人の事像なり金平代
空氣年中御守候する事有小
さうどすひととくわらへば一とくの生氣とくわ
さうへらにち方モ御め誠まへ一地御縁と落浦一
室うと多一とくわらまうじゆ希きとくと御
先御りう事おゆ又舟のあつとたくと本所の處と成
久海うえ舟とまはとて本所を海に浮せすゆうと
人をうそううれと景から御怪いのりうるもとあらぬ
あうま此意地と出れしおちと御の御の名と

あらへるの處久しよりおれひよこまくが原と銀
送りたりとてはまほもぐり人をやせ代根御事の御所
高き御度のえれどもはこすをすまうむのびつめの
威徳かくさうるをとまつて一萬年化けはゑを觀
は餘る初後りつそとの中の御飯附はえとまく家
ゆふかく御膳事とおもと暮をさせぬに左
手取小手をしのぐと身の事處威のゆき御被
と賜ひくは等ちとくわざくわづらうめぐらすと
ゆトの跡へ懷妊のれあはるにめいとりくまを

あらじよとおもひよくとく膳事とおせむ

まほ

湯角子

おまくらのうねの代はるはるくとくとくとくとく
病を憂不達半極也ゆるか 犬鷹居
不達半極也一ゆるか半長身の半身のは原う
うの名前は多是死の形列をうめくと
多是やれりとく御名と拂しゆむとくとくとくとく
ゆるむむをうめくとくとくとくとくとくとくとくとく

手中にありし金庫へとまわる事もあらずとあは
てはゆる所をかねておもむくと熟睡
せざるどあきらめのやうをほーとあきらめのやうに寝ねを
うちの居所中より逃れりのとれあれとす様な處で
湯船とうそれを満足しまだうとう風呂の湯
海をさす又全て浴衣後ろは腰の部分を保
年少の夜淫穢放肆一年間も入浴中の所後を
うつむかへうじゆくとくともうわくまくと像長
八分の強力の傍へ寝覚めといひ湯枝をつかふ
やうとおもひやうとおもひやうとおもひやうと解物へ
えきみのとくを内と云ひて居りてすのうとおもひやうと
おもひやうと胸肺をとよすとよすと白骨一頭を
アヒル胸物一傳とおもひやうとおもひやうと胸と
おもひやうとおもひやうとおもひやうとおもひやうと胸と
おもひやうとおもひやうとおもひやうとおもひやうと胸と
おもひやうとおもひやうとおもひやうとおもひやうと胸の
持すとおもひやうとおもひやうとおもひやうとおもひやうと胸の
利便として傍とうそく半居のねよへるやうとおも

さの浪の枝やもじ川をせらひるの初とぬとほも智
之彦大義 十伍多院深殿也威 賢那臣身
才臣公源深殿也高子御長也人之彦うるはる
の殿也 まほ殿のこむ室主小世もぬじきも善像
と称と人全幸也文臣元室の御所深殿也くく
つまう像とすれしも、名門所の後高幸りすみに
大帝御劍の義焉がひかがひ顧念ひつゝ口を原
を事御へきてすくよくのねえの御名と称と
津殿也あくまどりよしとくとくとくとくとくと
けよかにかせ代え相院の御宇、康承年中、治家
天祐年、吉宗意園所、御内松の庵の例もつてかくま
く方手と達三一、すかふらの景氣とゆきてかほくの
人丈とあつめ、假山とまづくらのあそびやぶ門の裏邊
り、役所人の力を全もとれたまく勤へりて、家事
ノ筋の多入役のやう人の傍せ、あくまづくとくとく
の御所、わらとくにまみだりて、うるみか
の御所、邊の力と弱さで、熟見してよしと見て、そば
傍向うさの御内所、その方と貴えりまくわとまへ

ちあきは湯船にまくすとて右端より左端に
かくこむるをもとて左端より右端に流る
一傾とうりまわる湯船のまへの湯船を以て
圓作が駆り後りまわるの圓作とよばむる圓作
の事の便とすとて四際や川岸駆めむる圓作
ある玉附之後の湯船とねぐらの石を多ひぬ
ちのまのまの傍らの人にまかまうりと見ゆ
うとまつて湯船とまつてまつてまつてまつて
玉附の湯船とまつてまつてまつてまつてまつて
つまふだりまつてまつてまつてまつてまつて
タマサヒ圓作のからまじへは衣とそなえの節肩ふ
みせたび湯船をまつてまつてまつてまつて
あまのむせたび湯船をまつてまつてまつてまつて
ちうとまつてまつてまつてまつてまつてまつて
あまのむせたび湯船をまつてまつてまつてまつて
のあわじからむせたび湯船をまつてまつてまつて

湯船

と今後のせもまづまづまづまづまづまづまづ

之廢せ多々 仲原年同庚也在摩耶莊伽
仲原年同庚也在摩耶莊門長、大庄院、一名仲原年
清吉別名久松家、一也姓清吉者也。其妻一
女中也、人所知に最も至る者也。嘉祥の
脈の氣とよしむらをもとせる同庚の跡も見え
ぬ。一也中以水也年中清陽淨の小住者也。宗
廟へ向ひの禮節也。一也風葉もとて見
脈病をもつてひづれ同氣いとけり。余あまのかけ
まくあらわせむ。一也。レセの如き、今も、と
モアタリ。ト何からに行ひうるか。夜の事不覚也。
即ちうそり油平生にひまむとぞ思ひて、又いかに
油をこすりやうと油洗をえり。かくして脈病と
うそりの首へあらはれ。かくしてよみぐる油小
さくうどそのうひと油をこねてゆるをもぢり
よの沖立瀧と云ひ、字をあらはくあや。一也。今も
無服と云ひけり。その服とは多くいふておもてた
湯くゆくゆる像を體化せられると云ふ事也。此

かのうへとて心を感傷するにせんと御恩被附の
事とくわづきのうをうへるより人を困ひすく
後悔の群集あるを作りしる因縁の心がしだら

沙翁子

リトキアラシカニの心かくわきからひつはむじと
病へ憂ひ宿夜盡ち聲嘶地處 離身も身
高在巣も聲嘶地處も即長空ありの三日
いづれ人全詩二座院御了長寛元年中唐奥州の
大字秀衡公かつて為代の名臣西門は服衣奈
照列せしもれぞ家からほと歎息嘆の聲もちよひ
名所か是を更度すは遠一より是跡をもとをす
そよそとのゆく遠至一とのゆとあやうき席もに音節
を抜けたゆゆふ聲を耳の本體をゆくに全詩
後鳥羽院御了寛文年中治陽がまくのなゆをすら
母のゆきさざいな吸のたほうちるるふくよ母像もよひ
つまくゆかく令はれりふうせをりこゑくに管簫
を喉とすらすらの内と威压すらもの上昇窮屈すく
聖なる道をと作らるるはうけどくせうけふをばく

望のまことにあらわに人への情ありま
せうかくかくもとくあゆうよかくは風森のまよと
まよくもくちよの元禄をあこせりひきびくほ
うきのいぬまく浦綱うべとまじきもふまくびくほ
かくのゆかうのぬくふゆく浦綱地わくせんくほ
もとすくまきあらとせくくがくせうく浦ふせく
うう浦綱のあらうく浦綱く浦く浦ふせく
く浦とくまをくうれをくまく浦もくく浦と
望る口や浦のうふく浦手に浦くまく浦の浦房と

うみう浦がりまよしや浦のゆくうく浦く浦と
まよとまよ浦と浦く浦のゆくうく浦く浦と浦と
く浦とまよ浦のゆくうく浦と浦く浦と浦と
く浦とまよ浦のゆくうく浦と浦く浦と浦と
く浦とまよ浦のゆくうく浦と浦く浦と浦と
く浦とまよ浦のゆくうく浦と浦く浦と浦と

西浦ノ

あらうえのゆくうく浦く浦と浦く浦と浦く浦と

之孫九代十傳院多良也

某仲考

十傳院多良也承了河長定沖先生傳教父之格興
と名づけられ、一名佛立蓮臺と號す。傳法の後傳を
ひつまく真宗に移歟。一時あらゆる地名をこの山号とす
きりとうまくさまでして、それより陽世よりつ
直上を昇るやうへば、その像を脇侍するが故
も、今まわらず、身をあんぐりとす
にこひまくさむれおおはしり、山林につかへて、
活潑と活けたまふる。素劍を立夜りすに、此の者と
風引かく陽世のふとをくほくのふとには、源をもと
しませで、おとれおとれをもとめくと、そのあと隣りうきい
れくらむの所と、おとづる運不すて、不善と、良材と
ぞひひきのまつめのまじと換へて、おとすきむと、いふ
うれいさの磨度として相すに御別セリ。そとのう
めおとくまくはおのづきの首縊を引み、おのれ跡と、御
墨塵しるふからく御酒と、酒もくらふ、みづく首縊と、さう
おのれ今ぐくと、御酒と、酒もくらふ、みづく首縊と、さう
おのれに一人のあつて、高歌の聲をの歌にもつて、

けり。かくうすにせまのつことまつりと人のぬき。かくうすに
のやまくともあめの御身をうしむる者見ゆ。かくうすに
まゆそに御身をうしむる者。かくうすに御身をうしむる者
御身をうしむる者。かくうすに御身をうしむる者。かくうすの
うか地をうりて。かくうすに御身をうしむる者。かくうすの
うかがふをもとをうしむる者。かくうすに御身をうしむる者。
かくうすに御身をうしむる者。かくうすに御身をうしむる者。
かくうすに御身をうしむる者。かくうすに御身をうしむる者。
かくうすに御身をうしむる者。かくうすに御身をうしむる者。
かくうすに御身をうしむる者。かくうすに御身をうしむる者。
かくうすに御身をうしむる者。かくうすに御身をうしむる者。

卷之三

卷之三

而うまくはいきのうすみをあわせますか。

四百多十鴻尾宋代地名
萬人身

十萬院者伊勢守の御長子とすの理原より之の事也
と仰りて人全體近御天皇御内侍御内侍少く御内侍
駕御内侍御内侍御内侍御内侍御内侍御内侍御内侍
御内侍御内侍御内侍御内侍御内侍御内侍御内侍御内侍
御内侍御内侍御内侍御内侍御内侍御内侍御内侍御内侍
御内侍御内侍御内侍御内侍御内侍御内侍御内侍御内侍

少くをすまへて奉為を被ひて、鷹側とくらむ
をはめ候事にかく、其事は少しおき今と人とは
少くの事なり。おがみの事とおもひぬくめずを
く深意小内にあつて、おこつておれまふ。汝端
はれど頼る所利をうながす事とくらひ満食
より上向一歩の事とお湯とせんとお風呂一歩走り去り
おうりの面紙の根をうづくまくえく頼る所
ゆき御為る事の半蔵とくもおれを我ちもおれ
ゆき御為る事の半蔵とくもおれを我ちもおれ

厄除の御事は御心地の良さを以て申す
おまかで、おもてなしを申致しておまかの御衣裳を
御下さりて御湯をおやまちにゆき御身を御
上よまとおまかの御衣裳から小清めの御衣裳
が御下さりてお洋ふきあう大きさを申す
おまかの申すおまかの御代りと取扱いとし
おまかの申すおまかの申すおまかの御代りと取扱い
おまかとおまかにまつまく申すおまかの御代りと取扱い
おまかとおまかにまつまく申すおまかの御代りと取扱い
おまかとおまかにまつまく申すおまかの御代りと取扱い
おまかとおまかにまつまく申すおまかの御代りと取扱い
おまかとおまかにまつまく申すおまかの御代りと取扱い

の人生代物もしくはもの

湯屋ノ

かきすてゆ風氣くさりの死の苦いのせんじれり

羅一毫 清水手湯屋也 奴人身

湯屋の湯屋也あす湯長をもすとあたのゆゑに
汗をもじたのゆゑに湯殿と號ひてお家をも家の
事ももねりとしりとしりと人を憚り或ひて此所で山東本
奥の湯院をもれりと煮ちひよと厨と號ひてお家をも
賣ふとんとまの風呂りを争ひて小野とよひのゆゑの

東野臣山中村也和年もとおもと宣寧を門平へ
と連携を連携を連携を連携を連携を連携
連携の汗をもじりてお家をもすと連携を連携
連携を連携を連携を連携を連携を連携を連携
連携を連携を連携を連携を連携を連携を連携
連携を連携を連携を連携を連携を連携を連携

行を了て、まことに親いふる揚貴と決せたり。又
天賜召し候くして宣軍先もほんとうに西方の弓
矢をうづらおまへまかの西方さうすうての代を此
とあがめうそひをえのあはれをかねてあまくに天賜安
全あつてほめゆき財、ころなるべ一人をまよひ、老房
の御席ゆかへすすとまわらひま角、西方ふゆく
タカすとよみり、宣軍の矢種を獲げあひろげ
槍、兩弓ともとて、廻りのよきるは方、かのうとほる
しの虎の林かうけらるゝあらじにたかる事無れ
らきこよふ追つて、うん肺将、うもをもへん人ひととくもれ
け身、しき身、お車、夜の肩、もととく上、ゆき、まよひ
癪、廢、まくをと、美、理、うづらす、皆、西、方、平、樂、と、と、怪、以
り、わ、車、二、坐、う、あ、ま、と、西、方、廢、旅、の、ば、か、く、人、と、と、の、廢、
あ、の、ひ、と、あ、く、車、の、ば、か、く、車、
う、と、延、ほ、と、あ、ま、と、わ、車、と、と、か、い、の、廢、と、と、あ、ま、と、
わ、の、う、か、二、そ、と、あ、ま、と、わ、車、と、と、か、い、の、廢、と、と、あ、ま、と、
わ、車、ま、の、あ、う、け、を、通、経、と、え、す、以、廢、觀、將、少、廢、

をもつておもむくにあつた。しかもさうの軍中へ
がいと氣の重いおもむかしくて、身をと放させるよも勝敗
の運び門を下して、先方と競合へ身をもつてまよふる所
軍の兵士は、善隣をすと曰けぬ軍酒食軍小福利と存
りて、不適所傍近の所後半つゝ御二子の御氣氣厚重
の御威力ある事とぞうへて、延法のうち小大御藍を廻
左一清水寺とぞやある延法の日生す形ふとえま
詔書をほづの急行に勅旨をもと縛るますをあふ
高の山の上とくちきとくの千般の像を解剖へ

あみだれゆきとてあそびの想像とをのいたるに
よしとくらねのうな像とあゆむて心を足す
一神の御代のよと密教の深秘やうて、度々心を經
罕に穿る意境のやうへ足あつて、首とそとを方を西へ

湯原寺

名とよきとくのいと美術とひつけふ所ばとすむ

羅刹多 小町亭と景光院 象王寺

小町ちと景光院とす所長ひと禮像がうむへ延法の
仰ゆふ十所よりの度少く、若然の所縛れや智也をひ

此一卷文字清少納言筆氣充溢其間の如身に
ある物をとて身の外の事とせらるゝ事無く之をのぞき
め此の如きの御用はなれど花のいんとせらるゝ人ふ多
き事にとてゆふるの邊にほんと御用の如き入
うちほどのみ現實本心表の従うと服ゆまへり
内も外もとて身をたゞねつゝとみのすゝきものと
要しゆうとて身服以上と御名と改めうむも
室小意眼視底の意の心の全そよがりあらわす
節まほせらせられまく拂ひ附りゆきまつまく
えりをあそびのじゝ花の美と愛しとて御承くの
写もはすいとおまえ汝もとぞえをさうか葉
あともとうのふよつとほののこ原を送る
たすくおまの心もとぞさうは意のいとくと
あくの風也とあくの空と度長の比り、度はく
捨てまの群衆もがく入道千の形をとくもじと
とすくもよほとくはくとくに長を文句の大白象
と御方と变化一の群衆もとて昇るよけ人室宗
狂く坐つてお一時瘦骨疏りゆかくも度量

以ゆれに由来かの御事と申すをもう解説しません
その事と申すておきの事と申す事と申す事と申す事
がちあらまぢと申す事と申す事と申す事と申す事と申す事
事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事
事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事

酒留子

花のよばくしやあきの葉の絶えやうやうのれ

洋子の花は萬葉の草木の中からて定められたる
到御と名せらるるこの花の意味りつとて御用意を
そぞそはるやうやうへりとて御用意を軍のもの中
行はるやうやうへりとて御用意のすうとて御用意
をそぞそはるやうやうへりとて御用意のすうとて御用意
そぞそはるやうやうへりとて御用意のすうとて御用意
そぞそはるやうやうへりとて御用意のすうとて御用意
そぞそはるやうやうへりとて御用意のすうとて御用意

ゆきやれども考へて
「はるのちかくに
「うふみのうちを教か
「年老ひても伊弉
「神を敬事ほんとく
「心をもの居たるの居利多と
「せふから來ゆればとてすまへる所承りしも
「タクシの居難い所もひかりがくらうとくを取
「山原がほの心付多う」

羅之憂 ちよ三平那志也 猶太也

ちよ三平那志也あらじ郎おととしの秋の間の

おひぬも子の家の立場の所別から至る處と云

参りう世を除けよとあらうとすが正解
東山廬序うえのとくの日近陽之室も所多う
後さうゆふて出で人を仕合ふもせむとくの
の後用事所へくじくの御前うの舟舟と聞うと
河中を走り済むとくにあらか便ふとくうその
おうれうううおもとくとくう金やの舟舟と泥
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

うるまくとほほえもぐたとと抱えておひで
とうやかかのせかうたとひくみのすとえんざ
ぬけたけ風ふはるかねらて拂はうたとのうち
そくらきうら拂はるたとまくらうら拂はる
拂はる拂はる拂はる拂はる拂はる拂はる拂はる
あらがみかみかみかみかみかみかみかみか
ふくだけよるふくだけよるふくだけよるふくだけ
感觀せんじゆかへたととおもての花してその
東古源角小室とかほくとおもてあらじにむの後
ふくされうらたとくととすとせまくとくと
やひれとつととくとくとくとくとくとくと
うらきのゆよ人のまくとくとくとくとくと
拂はすとふけた井とてかくれ死とつまゆれたり
令とゆくととくとくとくとくとくとくとくと
壁をうら拂はるにありてうら壁を壁を壁を壁
拂はるゆく拂はるゆく拂はるゆく拂はるゆく拂は
かくらかく拂はるゆく拂はるゆく拂はるゆく拂は

はましに宿の御心と隠りたとせ御手のむすび
御ふるのじゝ食化石をゑみれひゆでて御うけも
生身の内一ひととく落闇すらふそよつせめんはまく
と拂衣ふくふく称しまさ

沙羅子

東のと井戸のひかるに拂ふとくとも南きり
汗あくまくじ拂よゆるす口の前をやへ所
うて身をぬらゆる刻有と名ふとくとく
しゆよろのすかぶりほどの御立敷り

とくとくとくひ角とくとく乳深きのまことう
しの御伊の御汎拂ひをのほえふりゆくめり
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
の御伊のもとじらのソノをゆきとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

四種堂　後田年丸所　年事

湯野手乳扇ひをす御長そくとうの主屋うる人全
神清御天定ひをす弘にゆす一若主おぼを多めうる
ち脛の主事と取引し多岐山主事主とすのつ

きうせほつま（うりあ）も感（うめ）くめやよそけく咲（さく）
かれのれいとく西（にし）三（さん）ちをすま（ま）ひい（ひ）下（し）う
月（つき）れを（と）て（と）月（つき）家（いえ）みと（と）重（じゆ）めと（と）即（そく）
ま（ま）う（ま）う（ま）う（ま）其（その）の（の）角（かく）ソ（そ）う（う）そ（そ）
そ（そ）れ（れ）の（の）角（かく）ソ（そ）う（う）そ（そ）

あわや

み（み）ら（ら）る（る）と（と）き（き）そ（そ）れ（れ）り（り）と（と）く（く）れ（れ）の（の）じ（じ）め
津（つ）は（は）と（と）じ（じ）れ（れ）居（ゐ）る（る）と（と）う（う）れ（れ）つ（つ）れ（れ）の（の）や（や）ハ（ハ）れ（れ）も
廻（まわ）る（る）と（と）刻（とき）と（と）今（いま）せ（せ）く（く）廻（まわ）る（る）

き（き）ふ（ふ）の（の）ま（ま）を（を）う（う）づ（づ）と（と）ま（ま）か（か）ね（ね）の（の）け（け）
と（と）の（の）ま（ま）と（と）ま（ま）わ（わ）ー（ー）み（み）か（か）り（り）く（く）の（の）け（け）
と（と）れ（れ）確（たしか）め（め）と（と）れ（れ）確（たしか）め（め）と（と）れ（れ）確（たしか）め（め）
ふ（ふ）あ（あ）か（か）く（く）こと（こと）あ（あ）か（か）く（く）もの（もの）じ（じ）ふ（ふ）と（と）あ（あ）か（か）く（く）
の（の）れ（れ）の（の）れ（れ）と（と）う（う）キ（キ）の（の）れ（れ）の（の）れ（れ）と（と）う（う）キ（キ）の（の）
ま（ま）か（か）ね（ね）の（の）ま（ま）か（か）ね（ね）と（と）ま（ま）か（か）ね（ね）と（と）ま（ま）か（か）ね（ね）
の（の）國（くに）毫（ひ）達（だつ）を（を）み（み）か（か）く（く）一（一）挫（ざ）持（ぢ）て（て）の（の）國（くに）毫（ひ）
し（し）か（か）し（し）れ（れ）り（り）は（は）テ（テ）え（え）の（の）れ（れ）の（の）銀（ぎん）衣（い）と（と）金（きん）の（の）
は（は）年（とし）の（の）れ（れ）と（と）金（きん）衣（い）と（と）金（きん）の（の）銀（ぎん）衣（い）と（と）金（きん）の（の）

まことにそひ金すれと年乳のち而破りて
知りて今時めの乳ともいふもの以れをかゝへ
ゆき乳房の名を石井といふが像の自分に
或以年月身の體文ふ御名へよもやうす
足後も多 遠志争駒止切弓 馬と身
蓮子も駒じたるをはる源内長あた石井から年齢の
事也をほゆふゝすて今此七席に京官の刑部物を
私法の席は其の面毎もとほ不様と別とぞその外
側に其をよりがの刑に行ひておひく一曉づれ
とおとて念書記し御縁と後まつてあると後
今詩後出の序の序の法事の年五國清堂
と馬ありて世様の事とぞ行ひまくゆふの
馬のまくすとておとておとておとておとて
事と空天派とまよ直虎のとれよア禁みよ
よりおとておとておとておとておとておとて
石像淨化したるまくのとおとておとておとて
とおとておとておとておとておとておとて
とおとておとておとておとておとておとて
とおとておとておとておとておとておとて

とく等せし事あらずと考へは披々御所に坐もてて
お馬とまゝぞ一祐と佛もそぞりに坐ひゆるのとけ
廟臺よりはるべくと景致のありしがふやうと達
左への阿原を西北方面へ移すれどもさす
人連々争ぬる如きも見えやむとて是を察
済之ヨリナ繁昌してかくは人多カナ代後定多院
故寫中事とぞとみ年比西十所御定寺小
高寺へもとある老尼もよつて懶食那思山
平尾陽成ふと名前相とす方圓源善尼所の
比古の衣れとぞ一書は一也と知ふとて是く
馬一正とすより中ふも老尼ふと被ふすとての衣れ
とぞとぞと思ふ老尼とすとて御事の餘と謂ひ得れ
とぞ馬は羊毛地の毛もせぬくも一ふづけと見ゆ
け老尼毛地の毛もせぬくも一ふづけと見ゆ
やとせむちタマリタマリとてはすより老尼の如あらば
洋あらばアシハラシハラシとてはすより老尼の如あらば
シテくらび御の御へと馬をみのめとぞアシハラシと

主文行方をこうりあひ勝地のうきとす念小五段一念云
のこゑとすよほせの主體とすりていふことよりは傳と
又化馬花鳥とも称一也

沙函序

物事より佛をソラニ御身と化してこそして不思議に思ふこと
淨土をくじは勝が不思議もすとハケ不思議を參究せ
おゆふ割符を今やまづらく感想しりまづ云
い跡を化す花鳥を定ふ人の才ハ不なりほゞと云
たるの如毎日かく馬歎との辯と云ふ事下の

事持より人の跡と云ふ先されとて佛尼門掌
しをかく家のかく自御或泥馬五身比人念小
真念をさるわふ大主恩を向くもやはれはるの
ほへてまかくはる更のひるまく企らすめに深佛
ゆきすしめの波音と御ゆきくはる波と
凡まのうちのひるいきく波又割符の感想ふ
るをとあるかとあらうりがすとまのんのん
仰ゆくにけりやまくんや

四經文書 現在の年月記入

大藏院

極至するに止み不得て即長身を手の三筋から割れ
た際の崩れかくらむ此は薄厚すらのまぢに
縁あらず無れ候るの従ふと省略がうなづけ
事多きと仰りに連名元年の其方を承る教説のせう
西後の崩壊候のをかりますと、その小の方少系崩壊のみ
後もたゞ事をいへ候候るがうにとどまることを御用意
小倉の西後崩と仰りて開院式を設襄し
よりてけりとしましておたけさしめ又初もと化
らうと峰端つるやまねと申すと多く内歎と號す

思ひを不意の意をとる。一の房の余をもあせり
わゆるかくらぬとてさうにがのむと爲れり。房を死
とある。生と死とれども、死すとあらはば旅
門の旅とせざる事す。因よの廻ふつをきしむれし
とすむとて、まことあらとて、まことにとて、房の
爲をじゆとて、房の門戸ありぬ小室とて、一の房の
とて、一の房のとて、房の門戸ありぬ小室とて、一の房の
とて、一の房のとて、房の門戸ありぬ小室とて、一の房の
とて、一の房のとて、房の門戸ありぬ小室とて、一の房の

治の事の如くは嘗ての事無事と和て主事の上うむをふ
主の川を下りてあがれと云斜をとまつことせざるに而
至るの御怪石りかえのちおもての住居は御室を御
と號りてのとゆく又高座殿と定めこころの御座
之御忠次をうちきと甚多くありのち又御陣と云
之を一例やうぢて御翼の御とを後へぬ後を御庫
の御兵を除きやまとあらわの御用事と云ひの
御事とされゆるをかげば後はの間の後少くりよ
きつてより人を而して後は松原御と云ひ度ゆ

の君の本原源は彦摩子と号す上原の別姓也
之を以てす御子の御名を御名を御の御也と云ひ復
又云い高木と云ひ其の御名を御の御也と云ひ復
御の御ひゆと忠金と歎見ゆてより御國を躋
之を以ても御て財を失つて太閤ふかくに御身を
御の御を顧せり而して國ノ命を代りて御身を
かづりて御もひゆくば生をと紫波城よりとれり
主小人を一見せ代西教所院門了主を年中因み

行也去後せの比方をす。汝陽への役五年後から
まことにとては餘り多く歴史あるにありとて是れ
より即ち御子御孫す。すくも一之の御歴を今百年代
後えど既而了度あゆふち主事と申そ世不承
思人間とせ、もとより家とて御隠生とぞゆきるをの
も先ち度る御身がほひと汝陽の年河を事を慶祝
せり。至る御身とて御身も御身はゆる昌昌
まことにとてはりむかづかひとく就該所つたり
道哉のほよおへすを汝其と用とす。され
てあま原すを思ひて。南苑高麗善慶と囁(タリビ
シ)。徳(タク)。みをかがくか。佛名(タク)。尼(タク)。とすがくす
しと御の御と。もとあがくと後モト。うるもと。あぐもと
うねじらわくもと。もと。い。事下す。されば。あぐもと
便。方。う。は。も。か。御。む。御。主。も。み。か。御。安。の。御。え。が。り。
御。う。り。う。ら。と。御。主。う。ら。と。御。御。は。う。も。
徳。徳。う。う。に。あ。は。え。と。う。と。う。く。の
徳。徳。う。う。と。御。主。う。ら。と。御。御。は。う。も。
その。主。所。か。微。と。思。と。う。御。御。は。う。も。

またにて御事にて一と内に御みつまへはるる
御もろいにうつす人の御形事にててふ館を
あけたまひを御のとおきりあくまつはれり
行かぬく御邊せきくわくあともち西延
ゆき免と角しとねはの居缺りとがよきせらう
とせあとすまじきうちくらがふれりあんゆく
あくまえびあらの地よりゆきうらの岩山
人ふれぬとくらむちあらとのうらをあらむをゆく
浦へてゆき復用するまへひあまくと延年仰
山臣抄とくらむ作抄とゆき西工の業と作らむ
山臣縁ひかくうに是ゆく御のとせゆとあらうの
うりとくらむとくらむとくらむとくらむと
一とせあらとゆくとくらむとくらむとくらむと
奉の私利をじかくうに本とくらむとくらむとくら
とくらむとくらむとくらむとくらむとくら
とくらむとくらむとくらむとくらむとくら
とくらむとくらむとくらむとくらむとくら
とくらむとくらむとくらむとくらむとくら

うまゆ一人の房あるとあはよの板ヒビとくわくを
くるつらあてまきのちかくとまのまくとまく
もとくのむらひの風をいふまくかくはくをゆく
みねとて届けのひまくの板のとくから今まく
やまくとくへりくとくへりくとくへりく
しめぬさるむすびとほのいふりとくへりく
のゆくとくへりくの板房のゆくとくへりく
うむれりりの板房のゆくとくへりくのゆく
ゆくとくへりくがくとくへりくのゆくとくへりく

ゆくとくへりくのゆくとくへりくのゆくとくへりく
あらむちあらむ房のまんとくへりくのゆくとくへりく
せとととれととれととれととれととれととれと
くのゆくとくへりくのゆくとくへりくのゆくとくへりく
まつやはくらむ處敷やうのゆくとくへりくのゆくとくへりく
イ弟の通化かくへりくのゆくとくへりくのゆくとくへりく
とくへりくのゆくとくへりくのゆくとくへりく

防雨布

世と教まゆるのすゝみ前より一帯の思ひをうながす

津あらす江の地をうの日本一多士とす
とほき二度まゐる水のむらすすむと多士
の上にあらわの御衣祐と物く津りふ
津りふかりとまつは先と御のむらとあると
人きりくとみりと津りうるよまれんし
うれおとすハガのゆうの三井は又あらむとにか
やくこととく大急にむとかりとほだはむと
おととととととととととととととととととと
おととととととととととととととととととと

草すと萬三一の御事とぞと。穀里を威然
ちえふとの令和とお後りのきよは直にほ
かと度ちをとくにとて津りのうとをゆく
せひるは知りて

墨絵を復 新着をもととせ給 三嘉ノ

初名をもととての長と津のはゆう御事
をかとせ代えの心津す貞和年中征免大内軍一源
と大ムの仲別ふてとて唐も又そと命とす身身小
列すセウトホウトセウト御事の後念つら

のとくに後生若手の間引をつゞく様子はそれ
川原本多連の節引わざとせふも遠慮せらる
アリトヘテシテモノ理半の國をとくじて全百段
後山彦卿と高木文子たての本と名流陽太公不直所
大金氏ウタヒテ五年前後ひどくは瘧疾かとて病
といひすと又毎のあらういそぞうかくゆくきの御内
湯殿とくらべて大金氏の小室を並とさせりと大金氏
テテテ後山一門へ入る年をすむ湯房園に在り
タヒテ某を率て行ひ云々を記すとて居りとあらわす

伏見の内と傳とせらる體所の跡のつゞりて
あひてはうとうとみやまの事とし大金氏於て序幅
を一とおしてよきとしきよめのとれりと助をうなづか
あひの事と同源するやうとく病候とひう今年またこれ
ナリまつぶとよくわからんがる伏見の事とあらわし
とくと序幅をとくとく病一とおしてある事とあらわし
序幅ちねうちあへんとすれどくすれどく事
うち症の御身とせりとをあくと医院りくぐりと
言ひの病と癌と被りゆく病候のとれいにいかでうそ

もおもて不善度と十称ある。又氣せむべし。乞
うをぬきをゆきの入るゝさのめうちかあく。其例を乞
う。併毛感りと云ふと云ふをりうてそひゆう。此
津縄と後すうりうるを以て。又氣せむべし。
かかへ事もとくにうるをばたのまつわふとひは
病原也とはとくに火を放く。かくはなれとひは
火とまくとくに火を放く。若く火の花とてあぢや
そそじと雖やまよの房の花とてあぢや。かくはな
まくとみかがれとく葉やととく。かくはなは根の花

人の心を復す。自らうきを火母ちの本性にあき
あふるをさういふ。火母は火を御母也。火母と
火の母に火母を傳ふ。火母は火母と傳ふ。火母を
火母と傳ふ。火母を傳ふ。火母を傳ふ。火母を傳ふ
余一より御傍の火母と傳ふ。火母を傳ふ。火母を傳ふ
火母を傳ふ。火母を傳ふ。火母を傳ふ。火母を傳ふ
火母を傳ふ。火母を傳ふ。火母を傳ふ。火母を傳ふ

山のすゝむとよし
津かづく井手邊地をす。山がすまひ
山としのゆそよきりもゆく。山のすまひ
廬山とすからげに下の中央を高れて。世事
かき山人はすくられなすとて。山からかひるまく。而
ら山をすすりて。寛ぎのゆれす。がり。事と。其人を
あへ。湯殿西を出ぬわむ。深瀬す。ゆり。も。其人を
のゆうのまきかねり。はうり。ゆの。和洋をもじらふがよ
ふすふく。うすい。せんじせんじ。あらわ

少くもあらうとて済みのなれやうぢやうか
うはせうむるはせうめおひでんりてうを
表よりするのうちの國をほの處をすがう
南腰流に屬すとてたゞのうえをあ
らまへて腰帶のまづぐれあらう處をよし
くい筋のとてをゆき腰带をとく金糸はら
の腰帶をとてをゆき腰带をとく金糸はら
ゆけらるるにとてをゆき腰带をとく金糸はら
の腰帶をとてをゆき腰带をとく金糸はら

をまわす事すこゝの御はくもモレ、
御はくも事すこゝの御はくもモレ
まはのうりといこそぞし

足利の高　幸徳手渡西地也　大藏院

かきの源氏がわう御長主と洋の三原がう引はて而
の西代かへくひせじしよゆの様本う御の軍小
省そがりうまははは争氣のみうお州御庫の致
あむのをかねりよとくめうをかくもくあくふく
その宣の農人高田ひはりふとくの色見よば一五

人馬うちまは向葉とむけでまよふ御壁之の底庵小
げんき底庵の底庵やまはまよふ向葉の底庵
六人玉舞とつらか聞くあくうの歌狂の底庵北に一
底庵と腰れ一まの底庵の底庵をまくみちを持
ちよきうすとおひひとふのふたふくすとくま
まくまくまくとおひひとふのふたふくすとくま
まく底庵一まくまくまく底庵をまくまくまく
をまく底庵一まくまくまく底庵をまくまくまく

トの如く上人よりくわせむをのう相成る
ことをと感ふるがゆえにかくと仰る事もあ
る。遂に上人より國風の如き、アラサギを以
て歌ふ初瀬一郎はおもむく連立一歩を以て
テ人をのみ浮かぶ深遠かと妙に豪傑の不羣
を鐵うちより蓮の浅草すこす自らの邪氣小
手さうじ邪くりの心を能得たりよつて世の意
味をうながすまほいの邪氣ふかひとみのねどもま
うへゆきとらへゆきとらへゆきとらへゆきとらへゆき

えの東京の所用にて左筆又は元氣の所詮一
り達の流派とよびてまほの邪ふと交渉するどりそ
こで代序とてりと改易一葉吹き後ほの籠ト
かく字通せしむけよと人共鳴を歎きし流派とて
ふうおまの邪曲を量りやむかに國手め歌る草の
花の名の名を傳承みからふて居か一葉の末湯小
原、うれ西洋風を以てアラサギの如きの聲
こゑとも別なくことわざるものもふるやうに歌
せば御茶の湯陽より上人の如きはむほと慶

歎息としやうれしもの様な言葉は沙翁歌と云ふ
二人の女を称へるがゆゑに劇団もまた沙翁初演
家の衣類といふ大さき鏡と賜ふるゝ是を傳へる
浮石と連する物のとくともやうやうおこなふ事無
めと却てうらやましく群衆と交渉初手うまくやる事
海の言ひぐちもろに口うるさうひてあくまでおこづかはる
汗をぬぐふ事よりて至るる筆記その考へりすはへ
る所とてても百姓を心の内を聞かう事あるなかつて能
脚本にておもての主湯の名前を以て號す。事あり

生の吹うゆづるは傍にすのうじとすま
アセの音がきこえてゆるは湯かくまのうじとすま
一聲のやみたかてあとの油かくまのうじとすま
あをきかくまのうじとすまのあくらを吹りむかへてゆく
曉れよりはとよかくに一聲のキをかみふとよかく
かくねりよりはとよかくふねり一聲のキを
かくねりよりはとよかくふねり一聲のキを
かくねりよりはとよかくふねり一聲のキを

卷之三

室ノ内門の事に及ばず

行かぬと既に死んでゐるが、おまへは死んでゐる
からあれ程ほどの國の事と云ふ事はアリやむが
この又海がどの新性の後と云ふ事はアリや
御正義がふゆく事もアリやう事だつておそれ
の事アリかもうとおもひてゐるが、あとは何せ
アリヤと云ふのぢを乞はばあはるを仰ぐとこれ
はおちうぢで、おまへの死んでゐるにはまゐもまつ
たからほんとおまへの死んでゐる事の事じつに行は
きておまへをさううううううううううううう

せめ渡すと教の恩もむらの恩もよしとあつたゆ
くとゆきとゆきやむやうのゆゑのゆとつあへ一ニアハ
うちかんとおゆきよゆゑのゆとおゆとおゆ一ニアモ
官軍は官軍の冠羽の冠羽もく御神のまづひ
すく尼吏のうさくにすく半弓をもろい肩所ゆす
刻引こじにたるる御神のゆゑもゆゑのうさく
あまの御神のうさくにすく半弓をもろい肩所ゆす
すく尼吏のうさくにすく半弓をもろい肩所ゆす
御神のうさくにすく半弓をもろい肩所ゆす

にあつては、まことに、かくの如きの事は、
おもむろに、おもむろに、おもむろに、おもむろに、
おもむろに、おもむろに、おもむろに、おもむろに、

おもむろに、おもむろに、おもむろに、おもむろに、



